

【国際会議】JWRC 国際シンポ 2019@横浜

The 11th International Symposium on Water Supply Technology, Yokohama, Japan, July 9th- 11th,
Conference Center of PACIFICO.

はじめに

先日、水道技術研究センター（JWRC）が主催する国際会議に参加した。私ははじめての参加であり、発表者として会議 2 日目に口頭発表を行った。本稿では、この国際会議の様様やちょっとした小話を報告する。オフレコな話を入れれば 10 ページにはなるが、ここではその話は当然できないことをご了承ください。

会議の規模

国際会議とはいえ、日本に軸を置いたものであるため、体感として日本人が 8 割を占めていた。そのためか国内販売を主軸とした中小規模の民間企業ではなく、国外販売に目を向ける大企業（JFE や栗本 etc.）が展示会に参加していた。規模も水道研究発表会の体感 1/5 程度であり、各社のブースもそこまで大きくない。しかし、オランダの KWR や韓国の KIST などからの出席者もあり、学術的な価値は高いと考えられる。

私の研究発表

私は幸い口頭発表に選ばれ、島モデル遺伝的アルゴリズムについて発表してきた。座長に思いっきり人を間違われるハプニングもあり、緊張なく発表に挑めた。本番がいつもの練習よりも早い時間で終わるといういつもの癖を発揮したものの、特に問題なく終えることができた。Q&A はモデルを実管網に適用する予定はあるかというものと、布設費用以外のものを考慮することが出来るのかというものであった。

他の研究発表

管内の懸濁物付着過程をモデル化し、洗管などの対策効果を管網内の累積懸濁物量で定量化しようとする試みが発表されていた。対策シナリオとして、浄水場の機能を強化して懸濁物の管網への流入量そのものを減らすもの、洗管によって流入した懸濁物を排出するものがあった。これらは問題ないのだが、管路口径のダウンサイジングは流速の上昇によって管路内面に付着しづらくするだけで、付着しなかった懸濁物は管網のどこかへ流れていくだけである。それにも関わらず、累積懸濁物量が減少したという結果が提示されており、内面に付着しなかった懸濁物がどこへ行ったのかという疑問が残った。回答としては、「蛇口から出ます」とのことです、「我々はそれを飲むのですか？」という反応をついしてしまった。これでは本末転倒なのでモデルの改良が間違いなく必要であろう。日本人が大半で、簡易な英語での質問も多い。同時通訳者もいるため日本語での質問も可能である。国際発表に慣れていない学生に経験を積ませるには良い機会ではないかと思う。

大垣理事長が退任

JWRC の理事長である大垣先生が来月退任されるとの話を聞いた。したがって、今回の会議が JWRC 理事長として最後の大規模イベントとなるだろう。後任は未発表のようである。私も JWRC のプロジェクトのいくつかでお世話になった。国際的にも顔が広い方であり、会議期間中も JWRC の国際的な人脈を活用させていただく機会を頂戴した。退任後も変わらず活躍する姿を見たいものである。

Simple GA

Chromosome crossover and mutation iterate only in a population based on current objective value

